2020年2月2日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所 主日礼拝　NO.1105
聖　　書　　詩編 95:7／ヨハネによる福音書 16:7
説　　教　『 愛される偏り 』

「しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る(ﾖﾊﾈ16:7)」。
イエスは十字架を暗示する言葉を告げる。それにしてもなぜ、去ることが「あなたがたのためになる」のか。イエスがいるただ中に弁護者(聖霊)も来てくれればいいのに。

直弟子が羨ましい。生のイエスを見、聞き、声調や仕草、人間性の細々に触れることができて。人間イエスに接したら、私も少しは精進するんじゃないか、と想像する。しかし弟子たちがイエスと共にいた時、そこに弁護者は不在だった。
私たちはどうか。生きたイエスはここにおられないが、弁護者=聖霊の風に吹かれて方向転換し(悔い改め)、ふり返ると誰のものでもない己が足跡を確認できる。

「わたしが去って行かなければ、弁護者は～来ない(16:7)」。イエスと弁護者がタッグ組めば信仰も盤石になるだろうに、なぜそうならないのか。両者は同じ場に留まり得ないからだ。イエスと弁護者の事情ではない。人間の狭量な器には、どちらか一方しか入らない。
弁護者がやって来るゆえに「わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる」のだ。だからパウロは己が奥底を見据えて「肉によってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとしない(Ⅱｺﾘﾝﾄ5:16)」と語った。

人間イエスなら、キリスト者同士で共通のイメージを描きやすい。だが、聖霊たる弁護者では、愛や恵みのイメージがバラバラになりはしないか。
抽象的で漠然として、地上の福音から離れた観念になりはしないか。個人の思い込みの救いで、キリストの体たる教会は形成されないのではないか。

心理学者の K.ロジャースは豊富な臨床体験からこう著している。「最も私的で、最も個人的な感情は他人から理解され難いと思っていたが、結局それはほとんど例外なく多くの人に共鳴を呼ぶ表現であることが分った。こうしたことから一人ひとりの中にある最も個人的でユニークなものが、非常に深く他の人の心に語りかけるものであると考えるようになった(全集12巻)」。まことに興味深い。

キリスト者の私的で最も個人的なものは、弁護者(直訳的には〝傍らで呼ぶ〟)の弁明によって神の御前で隠し事なく明らかにされる。そうして神の前に独り立つ者こそが、教会の兄姉として響き合う。
一人ひとりの最もユニークなものが深く共鳴する。表面的な共通認識や約束事では、まったくない。
ヴィジョンを人間イエスによって共有することは意味があろう。だがいっそう重要なのは一人ひとりが弁護者=聖霊の風に吹かれ、奥底にあるユニークな偏りが響き出すこと。教会はそれが共鳴し合うキリストの体。聖霊は愛。愛は己が隅々を然りとし、兄姉の偏りを歓迎する。愛が教会をつくる。

「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民、主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない(詩編95:7)」。キリスト者は主による羊の群れ。そしてそれがどのような群れであるか、思い描けるだろう。
弁護者=聖霊の風に吹かれて、群れの一人ひとりがその人唯一の響きを発する。すなわち、主の御手が群れをどのように導き、主の養い方がどのようなものであるか、想像できる。そのような「主の声に聞き従う」のだ。人間世間の事情に応えるのではなく。

★

≪おまけのひとこと≫
羊の群の頭数として勘定されたら　そりゃつまらんな　まして毛質や肉質で等級づけられてもなあ
主の群はそうではない　一匹ごとに名を呼ぶ(ﾖﾊﾈ10:3)　有用性と程遠い私の偏りが呼び出される